

農林大臣となった特産課長「坂田英一」の 業績と人物像

～太平洋戦争時の甘藷・馬鈴薯大增産行政の旗振り役～

川越おいも友の会 事務局長

やまだ えいじ
山田 英次

1. はじめに～諸類会館初代理事長～

2025年は、琉球への甘藷伝来420年であると共に、太平洋戦争終戦80年・昭和100年の節目の年であり、諸類の歴史を振り返るうえで特別な年である。特に太平洋戦争期の甘藷馬鈴薯大增産時代を語る時、必ず登場する人物が、当時の農林省特産課長だった坂田英一（1897～1969）である。

坂田英一は、いも類振興会の前身である財団法人「諸類会館」の初代理事長（昭和25年10月～昭和32年5月の約7年間）を務めた。坂田英一の人物伝（冊子『加賀市の人物伝』石川県加賀市教育委員会・2014年）を読む限り、戦後の衆議院議員や農林大臣時代の功績ばかりで、重要な諸類増産期の足跡は書かれていない。よって、坂田英一の甘藷馬鈴薯大增産行政の活躍やその人物

像を、残されている文献類をもとに、後世のためになるべく明確にしておきたい。

2. 坂田英一の人生の歩み（概要）

坂田英一の人生の歩みを明確にするために「坂田英一略年表」を作成した。（別添の略年表を参照）その歩みを大きく分けると、次の3つの時代に区分される。

- ・Ⅰ期（誕生～東京帝国大学農学部～農商務省職員時代）明治30年～昭和12年の0歳から40歳まで。
- ・Ⅱ期（農林省特産課長～食品局長～食糧品配給公団総裁）昭和13年～23年の41歳から51歳までの諸類大增産時代。
- ・Ⅲ期（衆議院議員当選～農林大臣～死去）昭和24年～44年の52歳から72歳までの政治家時代。

特に重要なのは、Ⅱ期の諸類増産時代で、太平洋戦争遂行のため、国家主導で主力諸類の甘藷馬鈴薯を「決戦食糧（燃料資源・食糧資源・工業用資源等）」と位置づけ、大增産を図らなくてはならなかった。その国家的な大增産事業のトップの旗振り役だったのが坂田英一であった。



衆議院議員時代の坂田英一
（『特産課特産会二十五年誌』より）

3. 東京帝国大学から農商務省役人へ

坂田英一は、石川県江沼郡三木村（現在の石川県加賀市三木町）の豪農・坂田家の長男として、明治30年（1897）3月27日に生まれた。8歳のとき、三木村から金沢市内へ父母姉妹と共に転居し、それに伴って小学校も転校した。さらに金沢市の小将町高等小学校へ進み、石川県立金沢第二中学校を修了した後、(旧制) 第四高等学校（現・金沢大学）に入学し20歳で卒業した。

その後、東京帝国大学農学部に学び、大正9年卒業と同時に23歳で農商務省に入った。東京帝大の農学部時代のことを、農林大臣となった座談会のとき、坂田は次のように語って、対談者を笑わせている。

「わしは四高時代、数学が得意だった。数学だけは誰にも負けぬ自信をもっていた。将来大いに数学を活用できるものやろう、という野心をもっていた。そんなわけで百姓の息子の僕は、大学に進むとき、農業に関係したもので、数学をやろうと考え、東大の農芸化学を選んだ。あそこ農学部で、試験があるのは農芸化学だけだった。当時有名な鈴木梅太郎博士がおられた。講義はなるほど面白かったが、(自分は) 実験が駄目なんだな。そう不器用でもないんじゃが、定量分析なんかやると大事なところでこぼしたり、試験管をひっくり返したり・・・どうもいかん。それで僕の郷里の先生で、園芸・庭園学をやっている原博士のところへ相談に行った。“農業経済に移りたい”というのと、博士は、“君、いまごろになってそんなことダメだよ。第一入学してまだ一カ月じゃないか”とさんざん叱られてね。でも結局は農業経済の方にかかわることとなった。

もっとも当時は、農業経済科という独立したものではなく、農学科に包含されていた。あの時、もし農芸化学をやっていたら、多分農林大臣なんかにはなっとらんだろう。そのかわり、世界的な化学者になっとったかも知れんよ。ハハハハハ」(『農民の父坂田英一』坂田英一顕彰会編39頁より)

諸類行政に携わる前の坂田は、農政課の分室で、通称「小作部屋」という部署にいた。戦前は、まだ地主階級が強く、頻繁に小作争議が起こり、小作調停法を制定する必要があった。その小作部屋は研究室のようで、坂田のほか、芹沢光治良（後に小説家）、田辺勝正の3名は「分室の三学士」と呼ばれ、大変仲が良く、革新的な法案を作るべく情熱を傾けたといわれる。

4. 小作官より特産課の課長となる

坂田が農林省の小作官だった当時の日本は、昭和6年（1931）の満州事変を皮切りに、昭和11年（1936）の2・26事件、昭和12年（1937）7月の日中戦争の勃発と、急速に本格的な戦時体制へと移行していった。国家として総力戦体制への移行から、軍部からも小作争議よりも食糧増産の必要性が叫ばれた。昭和13年（1938）4月には、戦時体制の食糧増産を含めた農業統制をはかる一環として「農地調整法」が公布されたりした。

坂田は前年11月から昭和13年（1938）7月にかけて、ヨーロッパ各国の農業事情視察に出張し、2月にはスイスのジュネーブで開かれた国際労働会議理事会に日本代表として出席したりした。その当時の坂田の関心は、農業労働や小作問題だったと回想している。しかし、農林省農務局としては、



戦時中の特産課長時代の坂田英一・昭和19年当時
（『農民の父 坂田英一』88頁より）

食糧増産を強力に推進しなければならず、その業務が拡大したため、中心行政の部署であった農産課を二分し、米麦の増産は農産課が引き続き行うが、特産物の農作物は新たに「特殊農産課」を設置して行うこととなった。昭和13年12月に同課は、農産課内の一部北側を仕切って新設されたが、その初代課長に突然任命されたのが坂田であった。農産課の職員は、課長は同じ課内の主任技師から適当な人材が選ばれるだろうと推測していたが、農地問題を扱っていた別の部署の坂田（農政課自作農係・主任技師）が、予想外に選ばれたことにはびっくりしたという。

特殊農産課は、戦時が進むにつれ業務が拡大し、3年後の昭和16年（1941）1月には「特産課」と改名されるが、その取り扱う特産物の内容は次のようであった。

- ・ 主要な中心業務は、甘藷馬鈴薯のイモ類行政であった。
- ・ 工芸作物の麻類、ハッカ、除虫菊、コン

ニャクなど（特に麻類は軍需資材として国内での増産は重要課題であった）。

- ・ 園芸作物の果樹、野菜、野菜種苗など。
- ・ 茶、豆類など。

（『特産課特産会二十五年誌』昭和38年発行“思い出”174～186頁などより）

5. 特産課長としての業績

特産課長としての坂田英一の業績と印象はどのようなものだったのだろうか。

同じく『特産課特産会二十五年誌』の中に“歴代課長の面影”として、詳しく紹介されている。人柄は、朴訥で豪放磊落（ぼくとつ：純朴且つ素朴で飾り気がない。ごうほうらいらく：度量及び心が広く、細かな小事にこだわらない）な性格であったという。そのため特産課の家風は、部下への思いやりと陽気な雰囲気があったが、大きな仕事となれば、全員が一致団結して猛烈に頑張り、一週間や10日間、役所に泊まり込んで仕事をするのは平気だったという。課長としての仕事のすすめ方は、極めて緻密な頭の持ち主であった反面、極めて大あじで、自分で大局的な方向付けをすれば、細部については部下に委ねるといったやり方で、いわゆる部下に慕われる名課長であったという。だが、内部に対しては極めて寛容であったが、外に対してはなかなか厳しかったともいう。

その坂田課長の業績としては、

〈生産対策〉

- ・ いも類関係では甘藷共同育苗圃の設置、馬鈴薯採種保護地の設定、専任補助員の設置、改良増強対策、指定試験地の設置、優良種苗の配布など。
- ・ 麻類その他では原麻生産協会の設置、麻

類の改良増殖対策、除虫菊・ハッカの改良増殖対策、楮・三桮（コウゾ・ミツマタ）等製糸原料作物の改良増殖対策、日本特殊農産物協会の設立など。

〈流通対策〉

・法制関係では原料甘藷配給統制規則（後に諸類配給統制規則に改正）、苧麻大麻（ちょま・たいま）等統制規則、三桮楮等統制規制、日本輸出農産物株式会社法、澱粉類配給統制規制など。

・統制配給機関の設立と運営指導については、日本甘藷馬鈴薯株式会社（後に日本諸類統制株式会社に改組）、日本原麻株式会社（後に日本原麻統制株式会社に改組）、製糸原料配給統制協議会、日本輸出農産物株式会社、日本澱粉株式会社（後に日本澱粉統制株式会社に改組）など。

以上、多岐にわたる実績で、戦時体制下の非常時の農政史を飾るものであった。のちに坂田は、特産課長時代を振り返り、「（全精魂を打ち込んで仕事を行ったため）わが最良の時であった」と目を輝かせて回顧したといわれる。

6. 戦時体制下の諸類の用途状況

坂田は甘藷馬鈴薯の大増産をはかる啓蒙のため、刊行物への執筆や各所で講演を行っている。現在残っている文献類：日本甘藷馬鈴薯株式会社発行の『社報・創刊号』昭和17年1月の「甘藷馬鈴薯の配給統制について」や、『諸類配給統制の栞』昭和17年6月の「諸類の配給統制」、農政三月号別刷『特殊農産物事情』昭和18年3月、昭和17年10月の講演概要「甘藷馬鈴薯について」などより、戦時体制下、甘藷馬鈴薯がどのような用途に利用されていたか、その

大筋をなるべく推定して解説したい。（一部は『サツマイモの近代現代史』狩谷昭男著より補足）

甘藷馬鈴薯の生産割合〈昭和15年統計〉

甘藷は作付面積・約28万町（28万ha）で収穫高・約9億4250万貫（353万t）。馬鈴薯は作付面積・約16万町（16万ha）で収穫高・約4億3870万貫（164万t）。よって収穫量は、甘藷が全体の3分の2で、馬鈴薯は3分の1の割合であった。

甘藷馬鈴薯の総生産量の用途状況

甘藷馬鈴薯等の統制配給は、日本甘藷馬鈴薯株式会社を通して行われた（昭和17年当時の状況）。

- A：総生産量の50%〈農家〉・・・農家の自家用食料、種芋用、家畜の飼料用。
- B：総生産量の13%・・・生イモとして都市等の消費地（家庭等の食料）へ販売。
- C：総生産量の15%・・・澱粉や芋粉の原料用（食料品加工や各種工業用原料として重要であった）。
- D：総生産量の5%・・・酒類の原料用（合成酒や焼酎の製造など）。
- E：総生産量の15%・・・液体燃料その他工業原料としてのアルコール製造原料、軍需用資材としてブタノール、イソオクタン、アセトン類の原料。
- F：総生産量の2%・・・カラメル、コーヒー代用、酵母培養基、パン類、麺類、飴、菓子等の原料用その他。

この中で、特に重要視されたのが、食糧用として充足させることと、軍需用資材の確保であった。液体燃料は、無水アルコールとしてガソリンに混入することが昭和12年より強制的に義務付けられ、ブタノールとイソオクタンは航空燃料として重要で

あった。航空機の性能が上がるにつれ、航空燃料のオクタン価が低いと航空時間も短く、故障も起り易かった。航空機の向上と共にオクタン価100を目指し、オクタン価の良いブタノールやイソオクタンの製造が急がれた。

よって、坂田は特産課長として、戦時下の食糧の確保と軍需用原料の確保のため、国家的な事業の、甘藷馬鈴薯の大増産に渾身を込めて取り組んだ。そのことにより、“農林省に坂田あり”と全国に名を轟かせ、イモ博士、青木昆陽の再来とも呼ばれたという。

7. 戦争終結と大食糧難危機の突破

終戦直後の昭和21年（1946）1月に食品局長に栄進したが、日本は当時、敗戦の混乱状態と共に国民が飢えるほどの深刻な大食糧難の時代であった。そのような時、翌22年6月、経済安定本部生活物資局長として出向した。その主な業務は、当時の日本の台所をあずかる最大の責任者として、東京の日比谷にあるGHQ（連合国最高司令官総司令部）の要人と連日交渉にあたることだった。8000万人の空腹を救うため、進駐軍のアメリカから食糧を獲得するためのGHQ通いだった。坂田は当時のことを、次のように語ったとされる。

「とに角、何としてもアメリカから食糧を獲得することだと、ひたすらねばったね。あちこち、栄養失調で倒れている話や、街は失業者であふれたところだったからね。どうやら、わしのがむしゃらな懇請がアメチャンにも認めてもらうことが出来て、膨大な放出物資の獲得に成功したときは、これで一千万人の餓死者は出さずに済みそうだと、ホッとしたよ」

GHQの要人の口から「ミスター坂田はなかなかの能吏（のうり：能力のすぐれた役人）だ!」という称賛があったという。そのような業績もあり、翌23年（1948）2月に食糧品配給公団総裁に就任した。（『農民の父 坂田英一』104～107頁より）

しかし、その敗戦直後の混乱期、愛する長男の耕一（23歳・東京帝国大学農学部農芸科2年生）が昭和22年（1947）1月に急性肺炎のため当然急死し、坂田は深い悲痛を味わった。その悲しみをぬぐうためか、翌23年8月に故耕一の日記集『落ち椿』を自費出版している。

いずれにしても、坂田のがむしゃらな食糧交渉がなければ、敗戦直後の、一千万人の餓死者を出すといわれた大食糧難は突破できなかったかもしれない。

8. 衆議院議員として農水大臣へ

坂田のそのようながむしゃらな働きをみていた、当時の吉田茂総理は、神奈川県大磯の吉田邸で、坂田に「戦後の台所をお引き受け願ってありがとう。マッカーサーが、あなたをほめていましたよ」と告げ、政治家になることを熱心にすすめた。その後、何度か催促の電話があり、考慮の末“国の農業の発展のために”と腹をきめ、昭和23年11月に公団総裁を辞任した。翌24年（1949）1月に地元石川県より出馬し、衆議院議員にトップ当選した。

国会議員に転身しても農政を主体に地元数々の大きな業績（加賀三湖干拓・河北潟干拓・金沢港の開港・金沢中央卸売市場の開設・北陸自動車道の建設など）を残し、昭和44年（1969）7月に急性肺炎・心不全で、72歳で逝去するまで7回の当選を果た



農林大臣時代の坂田英一「1965年9月・沖縄県の全琉農業協同組合大会出席」（沖縄県公文書館所蔵）

した。その間、昭和40年（1965）6月の第一次佐藤栄作内閣では、待望の農林大臣となり、1年2カ月要職を務めた。

政治家時代の業績や人柄などは、文献の『農民の父 坂田英一』『加賀市の人物伝』『坂田英一先生を偲ぶ』などに詳しい。

政治家時代の諸類とのかかわりは、財団法人諸類会館初代理事長（約6年半）と共に、昆陽先生遺徳顕彰会相談役（事務所・目黒不動瀧泉寺内）、岡山県笠岡いも博物館の財団法人いも博物館理事などをつとめている。特徴的なのは、昭和26年（1951）1月に坂田をはじめとする11名の代議士・農学博士の連名で、吉田茂内閣へ『いも建

白書』を提出していることであろう。その内容は、まず、戦争末期からの食糧非常時の飢餓より救ったのは甘藷であるとし、輸入食糧の増加によって食糧事情が好転するにつれ、次第に甘藷を軽視・蔑視する風潮が生まれ、食糧として無用の長物品とさえしていると警鐘している。しかし、輸入食糧に頼らず、日本の食糧の自給化を目指すために甘藷馬鈴薯は今後も重要であり、その用途の多様性から、さらに本格的技術研究を推進し、生産や利用等に関して9項目の政策提言を行っている。戦争を乗り越えた体験からか、独立国として国民食糧の自給度を高めるため、甘藷馬鈴薯に対する施策の必要性を訴えている。

またエピソードとして、佐藤栄作内閣のとき農林大臣となったが、佐藤栄作は酒を飲まない甘党で、特に焼き芋が大好物だったといわれる。総理時代、世田谷の私邸の脇をヒューツという音を響かせて石焼き芋屋が通ると、こっそり勝手口から抜け出し、何本も買い込み部屋で大事そうにひろげて食べていたという逸話が残っている（朝日文庫『佐藤寛子の宰相夫人秘録』昭和60年5月発行より）。

焼き芋好きの佐藤総理のとき、甘藷や馬鈴薯に、特に縁のある坂田が農林大臣になったのは何とも奇遇といえる。

9. 死しても更に・・・

昭和44年（1969）に逝去したあと、昭和46年4月に石川県立農業短期大学（現・石川県立大学）が開校した。坂田は石川県の農業の将来を考え、農業教育へも情熱をもち農業短期大学の設置を関係方面に働きかけていたという。開校を見とどけることは



坂田英一に関する書籍『農民の父 坂田英一』『坂田英一先生を偲ぶ』



石川県立大学正門。
正面の建物2階が図書・情報センター



石川県立大学の図書・情報センター内「坂田文庫」



石川県立大学の大谷基泰准教授と図書・情報センター
の駒田洋子司書（「坂田文庫」にて）



「坂田文庫」の中の、いも関係文献類



石川県加賀市農協本店前の坂田英一の銅像



石川県加賀市農協本店前の坂田英一銅像
（昭和52年11月に建立）

できなかったが、大の読書家であった坂田の蔵書類が現在の同大学の図書・情報センターに「坂田文庫」として、農業に関する本を中心に和書3323冊・洋書252冊の計3575冊が大切に保管されている。開校後、坂田金子夫人により寄贈されたが、その中には、特産課長時代の貴重な甘藷馬鈴薯の文献類が残っている。

また、8年後の昭和52年（1977）11月に、郷里の石川県加賀市農協本店敷地内に、坂田を敬慕する奉賛会により坂田英一の大きな銅像が建立された。霊峰白山を仰ぎ、坂田が精魂をかたむけて開発に尽力した加賀三湖干拓地を間近にみる位置だという。風景は変わったが、50年近くたった現在も、同農協駐車場脇に綺麗な状態でたっており、日本の農業の行く末や甘藷馬鈴薯の将来を、

ひとり静かに見据えているようであった。

10. まとめ

坂田英一が生きた時代は、世界戦争を遂行するため国策として甘藷馬鈴薯を大增産する時代であった。日本で一番、甘藷馬鈴薯の生産や利用技術に力を入れた大転換期の時代であった。その影響が、戦後の甘藷と馬鈴薯の発展に色濃く残されたといえよう。2025年は終戦80周年の節目の年であり、改めて坂田英一を通して甘藷馬鈴薯の歴史を振り返っていただければと思う。

今回の取材にあたり、石川県立大学の大谷基泰准教授と同大学図書・情報センターの駒田洋子司書、さらに文献調査では、いも類振興会の矢野哲男理事長に大変お世話になった。ここに感謝を申し上げたい。

坂田英一（1897～1969）略年表 ～農林大臣となった「いも農政技官」、戦時中のいも類大增産の旗振り役～

2025-1-13：山田英次作成

和暦	西暦	満年齢	内 容
明治30年	1897	0歳	3月27日、石川県江沼郡三木村（現加賀市三木町）の豪農（父・間平と母・さき）坂田家の長男として生まれる。※間平は、同じ三木村の資産家・奥出家からきた養子で、役人であった。
明治38年	1905	8歳	三木村から金沢市中川除町へ転居する。それにより三木小学校より、金沢市新堅小学校へ転校。
明治40年	1907	10歳	3月、金沢市新堅町小学校4年卒業。
明治43年	1910	13歳	3月、金沢市小將町高等小学2年修了。
大正3年	1914	17歳	3月、石川県立金沢第二中学校卒業。
大正6年	1917	20歳	第四高等学校卒業。
大正9年	1920	23歳	7月、東京帝国大学農学部卒業。 9月、農商務省入省。
大正12年	1923	26歳	4月、金沢市の石川病院の石川金子と結婚する。 （その後、長男：耕一、次男：武彦、長女：和子の3人の子をもうける） ※9月1日、関東大震災。
大正13年	1924	27歳	9月、農商務省小作官。
昭和6年	1931	34歳	※満州事変おこる。
昭和9年	1934	37歳	※沖縄100号の育成（沖縄県農事試験場）。

昭和12年	1937	40歳	11月、欧米各国経済調査のため出張。 ※日中戦争おこる（7月7日）。
昭和13年	1938	41歳	2月、ジュネーブにおける国際労働会議に日本代表として出席。7月、帰朝。 12月、農務局特殊農産課長（これより約8年、いも類の増産事業に励む）。 ※護国諸（高系4号）の育成（三重県・高知県の農事試験場）。
昭和14年	1939	42歳	8月5日、(農林省令) 原料甘藷配給統制規則により8月20日施行から原料用甘藷の自由販売禁止。
昭和15年	1940	43歳	6大都市、北海道、関西地方向けのいも類の配給について、「青果物配給統制規則」による集荷配給の確保措置が講じられる。また昭和15年度から、甘藷・馬鈴薯について、基準数量、増産数量、生産目標を定めて都道府県に対して生産割当を行い、その増産が取組まれる。
昭和16年	1941	44歳	1月、名称変更し、農政局特産課長。5月1日～2日全国の甘藷栽培の達人を集め「甘藷増産体験懇談会」（主催・大日本農会、農林省助成）を開催。 8月16日、藪類配給統制機関として「日本甘藷馬鈴薯株式会社」を設立。 8月20日、国家総動員法に基づいて「藪類配給統制規則」を公布（施行9月11日）。これにより甘藷・馬鈴薯とも用途を問わず、自由販売禁止。 ※12月8日、太平洋戦争はじまる。
昭和17年	1942	45歳	10月12日、青木昆陽の命日に日黒不動尊瀧泉寺で初めて、盛大な墓前祭を実施し、同時に千葉県幕張町の昆陽神社で甘藷祭を行い、さらに駿河台の大日本協会にて「昆陽先生と甘藷の夕」を行い、「甘藷馬鈴薯について」坂田英一等が講演する。 ※農林1号（千葉県農事試験場）および農林2号（鹿児島県農事試験場）の育成。
昭和18年	1943	46歳	3月、農政三月号別刷『特殊農産物事情～甘藷・馬鈴薯～』坂田英一著（農業報国連盟）発行。 6月4日、食糧増産応急対策要綱を閣議決定し、いも類の重点的増産措置を打ち出す。 7月、科学技術審議会専門委員。 ※『甘藷品種図説』（農林省農政局）3月発行。
昭和19年	1944	47歳	※沖縄県で行われていたサツマイモの交配採種事業を鹿児島県指宿に移転。 12月2日、藪類配給統制規則を廃止し、食糧管理法による統制に移行し、藪類も主要食糧となる。
昭和20年	1945	48歳	8月15日、太平洋戦争終結。終戦の混乱と共に、国民が飢えるほどの食糧大不足期となる。 ※高系14号を育成（高知県農事試験場）。
昭和21年	1946	49歳	1月、食品局長に就任。
昭和22年	1947	50歳	1月29日、長男・耕一（23歳：東京帝国大学農学部農芸科2年）急性肺炎のため急死。 6月、経済安定本部生活物資局長として出向（GHQとの食糧交渉の直接窓口となる）。
昭和23年	1948	51歳	2月、食糧品配給公団総裁。 3月、財団法人日本食糧協会理事。 8月、長男・故耕一の日記集『落ち椿』自費出版。 10月、吉田茂総理より政治家を数回薦められ、11月に公団総裁を辞任。（28年間の役人生活を終える）
昭和24年	1949	52歳	1月、石川県第一区より、衆議院議員当選（第24回総選挙）。最高点での当選。 6月、第3次吉田内閣の物価政務次官。
昭和25年	1950	53歳	10月30日、財団法人藪類会館を設立（財団法人いも類振興会の前身）し、初代理事長となる。昭和32年5月26日まで務める。 ※3月31日、藪類の配給統制を撤廃。
昭和26年	1951	54歳	1月19日、吉田茂内閣へ（いも増産により食糧の自給を図るべきとの趣旨）『いも建白書』を坂田英一含め11名の連名で提出する。
昭和27年	1952	55歳	10月、衆議院議員2回目当選（第25回総選挙）。 12月、農林委員長。
昭和28年	1953	56歳	4月、衆議院議員3回目当選（第26回総選挙）
昭和29年	1954	57歳	12月、財団法人特殊農産物協会理事長
昭和30年	1955	58歳	2月、衆議院議員選挙にて落選（第27回総選挙）

昭和33年	1958	61歳	5月、衆議院議員4回目当選（第28回総選挙）
昭和35年	1960	63歳	6月、米国生産性向上視察議員団団長として米国に出張する。 11月、衆議院議員5回目当選（第29回総選挙）。 12月、農林水産委員長。
昭和38年	1963	66歳	6月、石川県土地改良事業団連合会会長。 11月、衆議院議員6回目当選（第30回総選挙）。
昭和40年	1965	68歳	6月3日、第一次佐藤栄作内閣で農林大臣となる。 ※翌年の8月1日まで1年2カ月つとめる。9月、沖縄産業指導のため出向。
昭和42年	1967	70歳	1月、衆議院議員7回目当選（第31回総選挙）
昭和43年	1968	71歳	1月、勲一等瑞宝章を授けられる。
昭和44年	1969	72歳	7月22日、急性肺炎・心不全により逝去。
昭和46年	1971		4月、石川県立農業短期大学が開校。その後、大学に坂田英一の蔵書が寄贈され「坂田文庫」となる。
昭和52年	1977		11月23日、加賀市農協前に坂田英一の銅像が建立される。
昭和55年	1980		6月、顕彰会により『農民の父 坂田英一』発刊。